

ゴーゴリの「ПОШЛОСТЬ」をめぐって ——ナボコフの論を手がかりに——

諫 早 勇 一

0. はじめに

ウラジーミル・ナボコフの研究においては、従来からposhlost (poshlustと綴られることもある) という語がよく引かれ、ナボコフの研究書として権威のある*Garland Companion to Vladimir Nabokov*にはPoshlost¹という項目まで立てられている。さらに、この言葉はナボコフによって英語でも一般的に用いられるようになり²、英米の文学批評の語彙にさえなったという³。

ナボコフ自身がこの語の意味をどう考えていたかは、彼の『ニコライ・ゴーゴリ』(1944) からいちばんよく理解することができるが、このほか彼の1940-50年代の講義ノートから編まれた『ロシア文学講義』(1981) や*Strong Opinions* (1973) に収められた1967年のインタビュー⁴からもその一端をうかがうことができる。

たとえば、『ニコライ・ゴーゴリ』から関係箇所を青山太郎氏の訳で引けば、

「ロシア人がposhlost (ポシロスチ^{ポシロスチ}強勢アクセントは第一音節posh) にあり、語末のtはフランス語restiez, émoustillant等におけるtにやや似た、湿った軟かみを有する) なる一語によって簡潔に言い表わす観念の諸相は、これを言うために英語ならば数個の語を用いねばならず、しかも全体を覆うことは決してない。(中略) poshlustの有する諸相をすべてとは到底言えないが、いくつか表現している英語を挙げるなら、例えば、cheap, sham, common, smutty, pink-and-blue, high falutin', in bad taste [(大意) 安っぽい、いかさまの、平凡な、汚れた、味気ない、

大言壮語の、趣味の悪い] 等である。(中略)ここに挙げたさまざまの例から明らかになったことと思うが、poshlostとは単に誰が見てもつまらないというだけのものではなく、偽りの勿体ぶり、偽りの美しさ、偽りの利口さ、偽りの魅力をも意味している。』⁵

また、『ロシア文学講義』に収められた「俗物と俗物根性」(“Philistines and Philistinism”)ではこう述べられる(小笠原豊樹氏の訳による)。

「ロシアには気取った俗物根性を指す特殊な名詞「ポーシュロスチ」というのがある。あるいは、あつた。ポーシュロスチは、屑であることが誰の目にも明らかな対象を指すだけではなく、むしろ偽りの重要性、偽りの美、偽りの知恵、偽りの魅力を指す。何かにポーシュロスチという恐ろしいレッテルを貼ることは、美学的判断であるばかりか、道徳的弾劾でもある。真なるもの、善なるものは、決してポーシュロスチにはなり得ない。文明の恩恵に浴していない素朴な人間がポーシュロスチを生み出すことは、決してとは言えないまでも、滅多にならない。ポーシュロスチは文明の虚飾を前提とするからである。』⁶

このように、ナボコフがゴーゴリ論のなかで紹介したposhlostという概念は、ゴーゴリ文学の枠を超えて英語としても定着していき、ナボコフ文学を論じる際に重要な語⁷であるばかりでなく、文学批評の用語としても無視できない地位を獲得するまでになった。

だが、poshlostという語を英米の読者に広めたのはナボコフかもしれないが、ゴーゴリの文学をめぐってこの語を用いたのはナボコフが最初ではないし、ゴーゴリの文学におけるこの概念の重要性を強調した批評家もナボコフ以前にけっして少なくはなかった。本論では、ゴーゴリの文学とposhlost(以下ロシア語からの引用ではпошлостьと綴る)との関係について研究史を振り返るとともに、ナボコフの主張をそうした歴史の中に改めて位置づけ直してみたい。

1 - 1. ゴーゴリと「пошлость」

ゴーゴリの文学をめぐって пошлость という語を初めて用いたのは、じつはゴーゴリ自身だった。多くの批判を浴びた『交友書簡選』(Выбранные места из переписки с друзьями: 1847) に収められた「『死せる魂』についてさまざまな人物に宛てた四通の手紙」(Четыре письма к разным лицам по поводу «Мертвых душ») の第3の手紙のなかで、ゴーゴリはプーシキンの言葉としてこの語を引き、自分の作品を読み解くキーワードとして論じている。河出書房新社から刊行されたゴーゴリ全集に収められている灰谷慶三氏の訳(пошлостьとその形容詞形 пошлый を訳した部分は、以下かっこの中に原語を示す)を引いてみよう。

「ぼくについては、いくつかの側面を分析してたくさんの方が言われたが、主要な特質は明らかにされなかった。それを感じとったのはただひとりプーシキンだけだった。彼はぼくにいつも言っていたものだ。見逃されることの多い些細な事柄が誰の目にも大きく見えるように 人生の俗悪さ (пошлость жизни) を明瞭に描き出して見せ、俗悪な人間の俗悪さ (пошлость пошлого человека) をすばらしい力をこめて浮かびあがらせることのできるこの才能はこれまでどの作家にもなかった、と。」⁸ (下線は引用者)

「ぼくの作品の主人公たちはいささかも悪人ではない。これら人物のうちの誰でもよいのだが、ひとつでも善良な性質をつけ加えてやれば、読者は彼らすべてと仲良くなるだろう。ところが 一切切の俗悪さ (пошлость всего вместе) が読者をびっくりさせたのである。彼らをびっくりさせたのは、ぼくの場合、次から次から いっそう俗悪な主人公 (герои один пошлее другого) が続いて出てきて、慰めになる現象がひとつもなく、哀れな読者がちょっと休息したり一息ついたりする場さえないということ、全編を読み終わったあとには、あたかもどこかのむし暑い穴蔵から白日の世界へ出てきたかのように思われるということなのである。もしぼくが絵に見るような怪物を描き出した

というのであったら、むしろ赦されたであろう。しかし俗悪さ (пошлости) はほくをとらえて離さなかったのだ。』⁹ (下線は引用者)

このようにゴーゴリは『死せる魂』に登場する人物たちをпошлостьという語で説明しようとしている。だが、このпошлостьを、灰谷氏のように「俗悪さ」と訳していいのかどうか、それにはもう少し語義の検討が必要だろう。

たとえば、пошлыйという形容詞はゴーゴリの『死せる魂』第1部の第6章にも登場する。上記全集の中村融氏の訳で引けば、まず主人公チーチコフが吝嗇な地主プリューシキンの領地に入っていくとき、「今ではもうどんな未知な村へも平気で行き、その俗悪な外観 (ее пошлую наружность) を見ても心を動かすということもなくなり」¹⁰と述べられているし、プリューシキンの顔についても「プリューシキンの顔がちょうどそれで、一瞬ちらりと感情の色がすべり抜けて行った後は、いよいよ無感動な、いよいよ俗悪なもの (пошлее) になってしまった」¹¹ (下線と原語は引用者による) と描かれている。

だが、前の引用の用法については、権威ある17巻本の『現代ロシア文語辞典』(Словарь современного русского литературного языка)にも引かれ、その意味はОбычный, ничем не выделяющийся (少しも際立ったところのない、ありふれた)とされており¹²、それを「俗悪な」と訳してよいのかには疑問がある。ゴーゴリにおけるпошлостьについて論じるには、まずこの語の意味の歴史の変遷に注意を向ける必要があるだろう。

1 - 2. «пошлость»の意味の変遷

さて、前述の『現代ロシア文語辞典』で、「пошлость」の形容詞形であるпошлыйの意味を引くと、まず古語・廃語としてБывший издавна, стародавний (ずっと昔からあった、昔からの)の意味が出ている¹³。それが「ありふれた」の意味になり、さらに「俗悪な」の意味に変わってくるわけだが、その変遷をMichele Berdyのまとめに従って整理してみよう。

Пошлый, which is the participle form of the verb пойти (to go) has been

used in Russian at least as far back as the 13th century. The original sense was something that had “come into existence,” something customary, the way of doing things. In time it came to mean something “ancient” or “usual.” When Peter the Great was cutting short beards and kaftans, what was customary (пошлый) became negative. For a while it meant “low quality” (in other words, what’s old is no good). And then it came to mean something “devoid of meaning” or “trivial”: meaningless custom observed by habit.

Today пошлый is most often used in the sense of “crude” or “vulgar”: пошлый анекдот (an off-color joke), пошлый намёк (innuendo) or пошлый юмор (crude humor).¹⁴

つまり、もともと習慣・慣例となっているものを指す形容詞だった пошлыйが、ピョートルの改革以後否定的な意味合いを持ち始めて、やがて意味のないもの、つまらないものを指すようになり、今では「粗野な」もの、「俗悪な」ものを表すようになったという。そして、ここで注意すべきは、ゴーゴリの時代と20世紀以降におけるこの語の意味の違いだろう。たとえば、上記の文を引用したネットのページでは次のように説明されている。

So the Nabokovian meaning is relatively recent, probably not much older than Nabokov himself. In the mid-nineteenth century it meant ‘common, banal, trivial,’ without the implication of philistinism that became attached to it later. When Baratynsky says, in his poem *Осень* (1836-37), “Глас, пошлый глас, вещатель общих дум” (‘Voice, *poshlyi* voice, prophesier of common thoughts’), he is using the older meaning, and so are Gogol, Pushkin, and other writers of the day. I fear that the prevalence of the Nabokovian meaning in the modern mind makes it easy to misread earlier writers.¹⁵

引用の文では話がナボコフに戻っているが、注目すべきはプーシキン、ゴーゴリらが活躍した19世紀半ばには、пошлыйはまだ「俗悪」という意味合い

を持たず、「ありふれた、陳腐な、つまらない」といった意味だったという確認だろう。河出の全集の灰谷慶三氏、中村融氏の訳は、そうした歴史的な変遷を無視した解釈と言わざるをえない。

それでは、上記のようなпошлый、пошлостьの歴史的意味を考慮に入れると、先に引用した『交友書簡選』の記述はどう解釈されるだろうか。

1-3. 『交友書簡選』におけるゴーゴリの主張

先に述べたように、『死せる魂』第1部第6章に出てくるпошлыйという形容詞が「ありふれた、陳腐な」という意味に用いられているとしても、『交友書簡選』で繰返されるпошлость、пошлыйも同じ意味だとは速断できない。「ありふれたもの」が「見逃されることが多い」とは考えにくく、そこで語られるпошлостьとは、むしろ多くの人が見すごしていたのに、ゴーゴリだけが気がついた特徴と考えた方が自然だからだ。したがって、『交友書簡選』に繰返されるпошлость (пошлый) の意味を理解するためには、第3の手紙をもう一度読み返さなければならない。

さて、先に引用した箇所をつづきを読むと、「ロシヤ人をびっくりさせたのは、その悪徳や欠点というよりもむしろその無価値さ(ничтожность)だった」¹⁶とあり、少し先には「ぼくは、知り合いの立派な人たちすべてから、彼らがたまたま掴んだ俗悪で醜悪なものいっさい(все пошное и гадкое)を取り上げて、それらを正当な所有者に返してやる必要があった」¹⁷(下線と原語は引用者による)とある。とすれば、ここで言うпошлостьとはничтожностьに近いもの、пошноеとはгадкоеと並列されるようなもの、と考えてよいだろう。

まずгадкое(醜悪なもの)は否定的な概念だから、それと並列されるпошноеもネガティブなイメージを表すものだろう¹⁸。またничтожныйという形容詞は、1-2で引いた“devoid of meaning”, “trivial”という表現ともつながるから、人間の中の卑しいもの、くだらないもの、汚らしいものを指すのだろうとおおよそ推測できる。これ以上具体的に言い表わすことは難しいが、いずれにしてもここに「俗悪な」というイメージを読みとることは時代的にも無理だろう。ゴーゴリの作品をめぐる、最初にпошлостьという語を用

いたのはゴーゴリ自身だったが、後にナボコフが用いるような意味をここに見ることはできない。

2 - 1. メレシコフスキイと「пошлость」

さて、ゴーゴリが自作『死せる魂』をめぐる「пошлость」という語を用いて以来、この語をゴーゴリ文学を読み解くキーワードと考えた批評家は何人もいるが、ここではまずメレシコフスキイ（1865-1941）の「ゴーゴリと悪魔」（*Гоголь и чорт*: 1906）を取り上げてみよう。第1部「創造」（творчество）と第2部「生涯と宗教」（Жизнь и религия¹⁹）とに分かれたこのゴーゴリ論は、冒頭からпошлостьという語に溢れている。拙訳で関係箇所をいくつか並べてみよう（пошлостьは訳さずにそのまま示し、必要に応じてその他の原語をカッコ内に記す）。

「悪魔は（中略）あらゆる深み・高みの否定であり、永遠の平板さ（плоскость）、永遠のпошлостьである。ゴーゴリの創作の唯一の対象は、まさしくこの意味の悪魔、すなわち〈人間の不滅のпошлость〉という現象としての悪魔（中略）、絶対的で永遠の全世界的な悪の現象としての悪魔、つまり〈永遠sub specie aeterniの相の下sub specie aeterniの）пошлостьである。』²⁰

「ゴーゴリははじめて、悲劇の中ではなく、あらゆる悲劇的なものの欠如の中にある、目に見えない、もっとも恐ろしい永遠の悪を見てとった。（中略）鋭さや深さの中ではなく、あらゆる人間的な感情や思考の鈍さ（тупость）や平板さ（плоскость）、пошлостьの中に。』²¹

「ゴーゴリははじめて、仮面を取った悪魔、自分の非凡さではなく、平凡さ（обыкновенность）やпошлостьによって恐ろしい、その真の顔を見てとった。』²²

「二人 [フレスタコフとチーチコフ：引用者注] の本質は永遠の中庸（середина）、〈あれでもない、これでもない〉（ни то, ни се）ことであり、完全なпошлостьである。』²³

「合一の白い色から、孤立と修道士生活の黒い色を経て、混合（смешение）と中庸（середина）とпошлостьの灰色へと向かう。』²⁴

悪魔とは〈永遠の相の下の〉*пошлость*である、といったアフォリズム的表現が、メレシコフスキイの真骨頂だろうが、ここでは宗教的ともいえるメレシコフスキイの世界観、芸術観にまで論を深める余裕はないから、*пошлость*という単語に集中して考えると、上記の引用からもわかるように、メレシコフスキイは言い換えを多用しているので、そこからこの言葉の意味を推測することができよう。

上記の引用で、*пошлость*は*плоскость*（平板さ）、*тупость*（鈍さ）、*обыкновенность*（平凡さ）、*середина*（中庸）、*смешение*（混合）といった語と並列されている²⁵から、その意味は、『現代ロシア文語辞典』で引かれた*Обычный, ничем не выделяющийся*（少しも際立ったところのない、ありふれた）という語義とも重なるだろう。とすれば、20世紀初めに刊行された著書の中で、メレシコフスキイは*пошлость*という語を、むしろ19世紀半ばに用いられていた意味で使っていたことになる。そのゴーゴリ論の中で、*пошлость*という語を多用しながらも、メレシコフスキイの念頭にあった概念は、同じ20世紀の作家ナボコフの用法とはかけ離れている。ゴーゴリと*пошлость*について論じるとき、この語の意味の振幅の広さ、使う人それぞれの抱くイメージの違いを忘れてはならない。

2-2. ゼンコフスキイと「*пошлость*」

つぎに*пошлость*という語を多用した批評家として、宗教思想家のゼンコフスキイ（1881-1962）²⁶の著を引いてみよう。なお、ゼンコフスキイのゴーゴリ論（*Н.В. Гоголь: 1961*）は、ナボコフのゴーゴリ論（1944）よりかなり後に発表されているが、成立の過程²⁷などから考えて、ゼンコフスキイはナボコフのゴーゴリ論を知らなかったと考えてよいだろう。実際、*пошлость*という語の重視という共通の特徴はあるものの、その語が担う意味については、両者の考え方は大きく異なっている。

ゴーゴリの「芸術的関心の対象は、人間の*пошлость*である」²⁸と説くゼンコフスキイも、ナボコフ同様に*пошлость*についてかなり明確なイメージを持っている。たとえば、以下の記述はどうだろうか（以下の引用は拙訳によ

る)。

「пошлостьとは何か、それをどう定義したらよいか？ пошлостьを〈陳腐さ〉(банальность)、〈平凡さ〉(заурядность)、〈灰色なこと〉(серость)、〈どっちつかず〉(серединность)と言い換えることはまずできないだろう。(中略) пошлостьはもちろん、ゴゴリが定義したように、〈とるに足りない〉(ничтожно)が、それでもこれは、この概念のほんの一部を説明するにすぎない。пошлостьはときどき笑いを呼び起こすが、それよりも反感(отталкивание)や嫌悪感(отвращение)を引き起こすことの方がはるかに多い。」²⁹

そして、ゼンコフスキイは言う。「пошлостьは美的に苛立たせるから、おのずから目をそむけさせるし、美的な嫌悪感(эстетическое отвращение)を呼び起こす。そして、何よりも(これはまだпошлостьの〈本質〉を暴くものではないが)人間の中に潜む自己満足(самодовольство)、上昇志向の欠如、自分のくだらない小世界に安住していることが、私たちの反発を引き起こす(нас отталкивает)。」³⁰

おそらくゼンコフスキイの場合、上昇志向とは人間世界を超えるような高次元の存在への帰依といった宗教的な色合いを持つのだろうが、そこまで読まなくても、まわりの人々には嫌悪感、反感しか引き起こさないうまくならない生活に安住する自己満足的な存在—それが彼のイメージするпошлостьだと考えられる。そして、キーワードは「自己満足」(самодовольство)と「反感」(отталкивание)、あるいは「嫌悪感」(отвращение)となるだろう。

そして、他にもいくつか例を引けば、「пошлостьとは、より高次元のものが存在するにもかかわらず、魂の低次元で外面的な動きが勝っていることに他ならない」³¹、「пошлостьとは(中略)魂の衰弱を経て、人間の魂が荒廃していくことの悲劇的な徴候である」³²、「このように、пошлостьのテーマとは、魂の貧困化、退化に関するテーマ、人間を高めることのできる別の力があるにもかかわらず、魂の動きが卑小化、空疎化することに関するテーマである」³³

(圏点は原文イタリック) などなど、魂の荒廃・退化にかかわる記述が *пошлость* をめぐって繰り返されているから、「自己満足」が魂の劣化と切り離せないことも重要だろう。

とはいえ、ここでゼンコフスキイが強調する *пошлость* が倫理的な概念でないことは確認しておかなければならない。たとえば、「外套」のアカーキイ・アカーキエヴィチを考えてみよう。彼は傍から見ればくだらない人生を送っているが、「いかなる面においても、モラルな観点からは責められない」³⁴。同じことは『死せる魂』のマニーロフについても言えるだろう。ゼンコフスキイが強調するのは「美的な」視点であり、アカーキイ・アカーキエヴィチについても、読者が彼に対して覚えるのは「モラルな反感ではなく、美的な反感 (*отталкивание*)」³⁵だとされる³⁶。*пошлость* は「モラルなカテゴリーの外」³⁷ (圏点は原文イタリック) にあるのだから。

2-3. そのほかの批評家と«*пошлость*»

本論は、ゴーゴリと *пошлость* をめぐって包括的な論をめざしたものではないので、最後に亡命批評家からもう二人だけ例を引こう。ともに *пошлость* について本格的に論じたものではないが。

一人はチジェフスキイ (1894-1977) で、その『十九世紀ロシア文学史』³⁸ では、ゴーゴリの出世作『ディカーニカ近郷夜話』(1831-32) に収められた「イワン・フョードロヴィチ・シポーニカとその叔母」をめぐって、“this sketch is the first of Gogol’s treatments of spiritual poverty (*pošlost*)”³⁹と指摘されている。ここではすでに *пошлость* という語がローマナイズされ、かつこの中に示されているから、この時点でこの語はすでに西欧の読者にも知られていたことがうかがえる。ゼンコフスキイの著とは異なり、この著にはナボコフの影響も想定できよう (精神的貧困 *spiritual poverty* という言葉は、むしろゼンコフスキイに近いが)。

もう一人は、後にソ連に帰国し粛清されたと言われるミルスキイ (1890-1939?)⁴⁰だが、彼はその『ロシア文学史』⁴¹の中で、ゴーゴリの *пошлость* について次のように言及している。

The aspect under which he sees reality is expressed by the untranslatable Russian word *poshlost*, which is perhaps best rendered as “self-satisfied inferiority,” moral and spiritual.⁴²

ナボコフがそのゴゴリ論の「ことわりがき」(Commentaries)の中で、「そのほかには、——とわたしは続けた——ミルスキイの『ロシア文学史』(Knopf, New York)の中のゴゴリに関する卓越した章以外、英語の文献で読むに値するものを知りません」⁴³と絶賛していること、пошлостьに関してここでも「翻訳できないロシア語」untranslatable Russian wordと述べられていること(先に引いた「これを言うために英語ならば数個の語を用いねばならず、しかも全体を覆うことは決してない」というナボコフの言葉を思い出そう)などから考えて、ナボコフがそのゴゴリ論の中でпошлостьについて論じた直接のきっかけはミルスキイではないかと考えられるが、その当否はさておき、ゴゴリについてпошлостьという語をキーワードに論じたのは、ナボコフが最初でないことは一度確認しておく必要があるだろう。

ミルスキイの記述に関しては、このほか「自己満足的な」self-satisfiedという語が目されるが、ここではこれ以上触れずに、これまでの論をまとめていきたい。

3-1. 誰が「пошляк」なのか

これまでの議論をまとめるために、まず批評家たちにとってпошлостьを体現している人物(пошляк)とは誰なのかを整理してみよう。すると批評家にとって千差万別であることに驚かされる。

まず、ゴゴリの『交友書簡選』には、「どうして第一部が俗悪そのもの(вся пошлость)でなければならないのか、またどうしてその登場人物がひとり残らず俗悪(пошлы)でなければならないのかは、訊ねないでもらいたい」⁴⁴(下線と原語は引用者による。なお、灰谷氏の訳語には手を入れていない)とあるから、ゴゴリの考えでは、『死せる魂』第1部に登場する人物はチーチコフだけでなく、マニーロフ、コローボチカ、ノズドリョーフ、ソバケーヴィチ、プリューシキンなどみながпошлякになる。

これに対して、ナボコフの『ニコライ・ゴゴリ』でпошлякとして名指しされているのは、「ポシリャーク」⁴⁵チーチコフただ一人であり、これに近い扱いを受けている『検察官』のフレスタコフについては「低俗」(vulgar)という語が繰り返される⁴⁶が、пошлостьやпошлякという語は避けられている。そして、前述のようにメレンコフスキイは、フレスタコフとチーチコフに関して「二人の本質は永遠の中庸、〈あれでもない、これでもない〉ことであり、完全なпошлостьである」と主張していたから、フレスタコフとチーチコフの二人をпошлякとしていたと考えてよいだろう。

一方、もっとも多くの登場人物をпошлякとしているのがゼンコフスキイで、彼によれば「ゴゴリにあっては、(歴史小説『タラス・ブーリバ』と断片「ローマ」を除く)あらゆるところでпошлостьが支配している」⁴⁷というから、『ミルゴロド』では昔気質の地主夫妻や二人のイワン、ペテルブルグものでは「ネフスキイ大通り」のピロゴーフや、「鼻」のコワリョーフ、「外套」のアカーキイ・アカーキエヴィチ、『死せる魂』のチーチコフや地主たちなどなど、そこに挙げられる登場人物は、ゴゴリの主人公の大半を占めると言っても過言ではない。また、チジェフスキイによれば、出世作『ディカーニカ近郷夜話』のシポーニカにすでにпошлостьがうかがえるというから、このリストはさらに広げられよう。誰をпошлякに数えるかは、その論者のпошлость観によって左右される(ただ、チーチコフだけは、全員がここに数えている)が、以上のようなリストから逆にпошлостьを定義することは難しい。そこで、次にいくつかのキーワードをもとにしてпошлостьの内実を考えてみよう。

3-2. いくつかのキーワード

まずゼンコフスキイの項で触れた「倫理的」「モラル」と「美的」について簡単に補足しておくと、先に引いたように、ナボコフの「俗物と俗物根性」では、「何かにポーシュロスチという恐ろしいレッテルを貼ることは、美学的判断 (esthetic judgment) であるばかりか、道徳的弾劾 (moral indictment) でもある」(原語は引用者⁴⁸)と述べられていた。つまり、ゼンコフスキイとは逆に、ナボコフはこの概念が倫理的な概念であることを否定していない。

とはいえ、ナボコフはまたチーチコフに関して、「道徳的見地から言えば (Morally)、チーチコフはほとんど何の罪も犯してはいない」(傍点は原文イタリック、原語は引用者)⁴⁹とも述べているから、пошлостьの倫理的・道徳的側面をとくに強調しているとは言えないだろう。пошлостьは正しい・正しくないという判断より、傍から見て快いか・むしろ嫌悪感を催すかという印象に密接にかかわってしよう。

すると、次に注目すべきはゼンコフスキイが強調する「反感」(отгалкивание)、「嫌悪感」(отвращение)となるが、ここでもナボコフがそれに逆らうかのように、пошлостьの持つ「偽りの勿体ぶり、偽りの美しさ、偽りの利口さ、偽りの魅力」(the falsely important, the falsely beautiful, the falsely clever, the falsely attractive)⁵⁰を力説していたことが思い出される。ナボコフによれば、пошлостьは「単に誰が見てもつまらないというだけのものではなく」、人を魅惑する偽りの魅力にも溢れているという。

ただ、пошлостьの持つ偽りの魅力というナボコフの指摘は、ゴーゴリ研究史の中ではやや例外的なものだろうから、これについて考える前に、もう一つゼンコフスキイが強調している「自己満足」「自己充足」に話を移そう。すると、この概念も何人かの批評家に共有されていることがわかる。

まずゼンコフスキイ以外では、ミルスキイがпошлостьを“self-satisfied inferiority,” moral and spiritual (自己満足的な倫理的、精神的愚劣さ)と表現していたが、このほか著名なナボコフ研究書『ナボコフの来世』(Nabokov's *Otherworld*: 1991)の著者Alexandrovも“M'sieur Pierre is an especially perfect embodiment of that petty evil or self-satisfied vulgarity called *poshlost*' in Russian, to which Nabokov gave famous definition in his book on Gogol.”⁵¹(下線は引用者。なお、M'sieur Pierreはナボコフの小説『断頭台への招待』の登場人物)と述べて、пошлостьを“self-satisfied vulgarity”(自己満足的な俗悪さ)と表現しているから、пошлостьと「自己満足」「自己充足」との結びつきは、現在広く認められていると考えてよいだろう。пошлостьというロシア語の意味がゴーゴリの時代とはかなり変化したいま、この語は「俗悪な」という意味を鮮明に帯びるようになったと同時に、傍からの評価とは別に「自己満足」「自己充足」しているというニュアンスも強まったのではないだろうか。

以上、*пошлость*の意味の変遷を現在まで駆け足で追ってきたが、「自己満足的な愚劣さ・俗悪さ」が、この語のおおよその理解だと集約できるだろう。

とはいえ、*poshlost*という英語を広めたナボコフの理解は、それとはやや異なっている。最後にナボコフの特殊性について簡単に触れておきたい。

4. 終わりに——ナボコフの*poshlost*⁵²

ナボコフの*poshlost*の特殊性の一つは、前述のように「偽りの魅力」の強調だが、忘れてならないのは、*taste*の占める位置の大きさだろう。0で引いた『ニコライ・ゴゴリ』の引用にも、*in bad taste*（趣味の悪い）とあったことを思い出そう。そして、*taste*とは客観的な判断基準ではなく、自分の趣味・価値観を前面に出して、そこから（俗悪に見える）相手を弾劾することに他ならない⁵³。

たとえば、現代の出版物に見られる*poshlost*として、“Freudian symbolism, moth-eaten mythologies, social comment, humanistic messages, political allegories, overconcern with class or race, and the journalistic generalities”⁵⁴と列挙されても、（一部分だけなら共感できる人はいても）共感できる人は少ないだろう。ゴゴリの作品論からスタートしたナボコフの*poshlost*論は、しだいにさまざまな分野をも射程に収めるようになり、やがては政治的意味合いさえ帯びていく⁵⁵。そこでは、ゴゴリの作品をめぐってさまざまな批評家を取り上げてきた*пошлость*という言葉は、その本来の意味を失っている。そのことが逆に*poshlost*という「英語」を世に広めることになったのは歴史の皮肉と云うべきだろうか。

なお、引用に際して、人物名の統一を図るために一部手を入れた。

本稿は、2009年10月24日に筑波大学で開催された日本ロシア文学会第59回研究発表会におけるワークショップ「生誕200周年記念 ゴゴリ文学への問いかけ」において行った報告を基にしている。

注

- 1 *Garland Companion*でこの語について論じたDavydovが、あえてposhlost'と最後にアポストロフを添えているのは、пошлостьという原語に忠実であろうとしたためだが、通常の英語ではアポストロフを省いて、たんにposhlostと綴られることが多い。
- 2 若島正氏は、ナボコフの『ニコライ・ゴーゴリ』に寄せた解説において、「本書のキー・ワードの一つである「ポーシロスチ」という言葉は、ナボコフが使って流通させた言葉としては、代表作『ロリータ』（1955）に出てくる「ニンフェット」に次いで有名なもの」と指摘している。若島正「解説—鏡の国のナボコフ」、ウラジーミル・ナボコフ『ニコライ・ゴーゴリ』（青山太郎訳）、平凡社ライブラリー 136、1996年、257ページ。なお、前述のDavydovも“Poshlost” (or “poshlost”) in Nabokov’s punning transcription; he also transliterated it “poshlost”) is a Russian word that Nabokov introduced into the English language”と紹介している。Sergej Davydov “Poshlost”. Alexandrov, Vladimir E. (ed.) *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. NY: Garland, 1995, p. 628.
- 3 Karlinskyはナボコフとエドモンド・ウィルソンとの往復書簡集に寄せた注のなかで、poshlostについて“Nabokov’s detailed discussion of this Russian concept of the trite and the banal in *Nikolai Gogol* helped popularize both the word (sometimes spelled “poshlost” in English) and the concept. It can be considered by now to have entered the vocabulary of American and British literary criticism”と述べている。*Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-1971*. Revised and Expanded Edition. Edited, Annotated, and with an Introductory Essay by Simon Karlinsky. Berkeley: Univ. of California Press, 2001, p. 157.
- 4 “Interviews by Herbert Gold and George A. Plimpton” (*The Paris Review*, Oct. 1967). Vladimir Nabokov. *Strong Opinions*. NY: McGraw-Hill, 1973, pp. 100-101.
- 5 ウラジーミル・ナボコフ『ニコライ・ゴーゴリ』（青山太郎訳）、103、111ページ。
- 6 ウラジーミル・ナボコフ『ロシア文学講義』（小笠原豊樹訳）、TBSブリタニカ、1982年、380ページ。
- 7 私もかつてこの問題についてエッセイを書いたことがある。拙稿「ナボコフ小説の「俗物」」、『えうゐ』第24号、1993年、11 - 18ページ。
- 8 ゴーゴリ「『死せる魂』についてさまざまな人物に宛てた四通の手紙」（灰谷慶三訳）、『ゴーゴリ全集 6』、河出書房新社、1977年、325ページ。原文はсм. Н.В. Гоголь. *Полное собрание сочинений и писем в 17 томах*. Том 6. М.-Киев: Издательство Московской Патриархии, 2009, С. 81. なお、引用の傍点部分は原文ではイタリック。

- 9 同上325-326ページ。原文はТам же, С. 81-82.
- 10 ゴーゴリ『死せる魂』第一部(中村融訳)、『ゴーゴリ全集 5』、1976年、176ページ。原文はГоголь. *Полное собрание сочинений и писем*, Том 5, С. 108.
- 11『死せる魂』第一部199ページ。原文はТам же, С. 123.
- 12 *Словарь современного русского литературного языка*. Том 10. М.-Л.: Издательство АН СССР, 1960, С. 1754.
- 13 Там же.
- 14 Michele A. Berdy. “A Common Problem to Pin Down”. *The Moscow Times*, 2 September 2005. http://www.omskgirls.com/news/20050902_mab.htm 2011年1月30日閲覧。なお、この記述はlanguagehat.com: POSHLOST (<http://www.languagehat.com/archives/002981.php>)にも引用されている。
- 15 languagehat.com: POSHLOST (<http://www.languagehat.com/archives/002981.php>)より。2011年1月30日閲覧。
- 16 「『死せる魂』についてさまざまな人物に宛てた四通の手紙」、326ページ。原文はГоголь. *Полное собрание сочинений и писем*, Том 6, С. 82.
- 17 同上328ページ。原文はТам же, С. 83.
- 18 ほかにも当該個所にはдурное свойство(悪い性質)とかдрянь(くず・がらくた)、гадость(けがらわしいもの)といったネガティブな言葉が並んでいる。см. Там же.
- 19 なお、以下表記は新正字法に改めている。
- 20 Д.С. Мережковский. *Гоголь и чорт*. Letchworth: Prideaux Press, 1976 (Reprint of 1906 version), С. 2.
- 21 Там же, С. 3.
- 22 Там же, С. 4.
- 23 Там же, С. 34.
- 24 Там же, С. 155.
- 25 このほかбездельность(無為・怠惰)と同義に扱われている箇所(проброзование бездельности(то-есть пошлости) жизни)もある。см. Там же, С. 7.
- 26 ワシーリイ・ゼンコフスキイは1919年に亡命し、ベオグラード、プラハを経て主にパリで活躍した。主著に『ロシア思想家とヨーロッパ』(1926)、『ロシア哲学史』(1948-50)などがある。
- 27 本著の「まえがき」によれば、ゼンコフスキイは亡命前にすでにゴーゴリ論をまとめていた(その一部は1916-17年に『キリスト教思想』*Христианская мысль*誌に掲載されたという)が、亡命時に原稿を持って出ることができなかったので、1959年のゴーゴリ生誕150周年を機に新たに書き下したという。см. Зеньковский, В. Н.В. *Гоголь*. (В кн. В. Гиппиус. *Гоголь*. В. Зеньковский. *Н.В. Гоголь*.) СПб.: Logos,

- 1994, С. 191. なお、「序に代えて」に触れられているのはメレシコフスキイの『ゴーゴリと悪魔』、モチュリスキイのゴーゴリ論 (*Духовный путь Гоголя*: 1934)、チジェフスキイの「外套」論 (*«Неизвестный Гоголь»*: 1951)、セチカレフのゴーゴリ論 (*Гоголь, его жизнь и творчество*: 1953) など、ナボコフの名前はない。см. Там же, С. 192-192. 1959年という年は、ちょうど『ロリータ』がアメリカでセンセーションを呼んでいた時期 (1958年) と重なるから、ゼンコフスキイもナボコフの名前は知っていただろうが、『ロリータ』の作者ナボコフがゴーゴリ研究書を出していたことは知らなかったかもしれない。
- 28 Зеньковский, В. *Н.В. Гоголь*, С. 215.
- 29 Там же
- 30 Там же.
- 31 Там же, С. 218.
- 32 Там же.
- 33 Там же, С. 219.
- 34 Там же.
- 35 Там же.
- 36 「倫理的」(「モラルな」)の意味は比較的捉えやすいが、「美的」の意味はわかりにくい。ここでは、厳密な定義は避けて、「倫理的」は「正しい」か「間違っている」かを判断するのに対して、「美的」は「美しい」か「醜い」かを判断する、という大ざっぱな前提で論を進めたい。
- 37 Зеньковский, В. *Н.В. Гоголь*, С. 215.
- 38 初出はドイツ語 (*Russische Literaturgeschichte des 19. Jarrhenderts*: 1964) だが、ここでは1974年に刊行された英語版 *History of Nineteenth-Century Russian Literature. Vol. I. The Romantic Period* (Nashville: Vanderbilt UP) による。
- 39 Dmitrij Čiževskij. *History of Nineteenth-Century Russian Literature. Vol. I. The Romantic Period*. p. 115.
- 40 ドミトリイ・ミルスキイ (元々の姓はスヴァトボルク = ミルスキイ) は1939年に没したとされているが、1940年代、あるいは50年代に生きていたという証言もある。см. Т.Н. Красавченко. “Мирский”. *Литературная энциклопедия Русского Зарубежья 1918-1940. Писатели Русского Зарубежья*. М.: Росспэн, 1997, С. 269.
- 41 D.S. Mirsky. *A History of Russian Literature from the Earliest Times to the death of Dostoevsky (1881)*. NY: Knopf, 1926.
- 42 D.S. Mirsky. *A History of Russian Literature. From Its Beginnings to 1900*. Evanston: Northwestern UP, 1999, p. 158.
- 43 『ニコライ・ゴーゴリ』、231ページ。
- 44 「『死せる魂』についてさまざまな人物に宛てた四通の手紙」、328ページ。原文はГоголь. *Полное собрание сочинений и писем*, Том 6, С. 83.

- 45 『ニコライ・ゴゴリ』、113ページ。
- 46 同上91ページ。参考までにそこから引用すると、フレスタコーフは「徹頭徹尾、甘美なまでに低俗 (vulgar) であり、ご婦人方も低俗であり、町の名士たちも低俗である」、「わたしはここで一層正確な言葉を見出しえぬままに vulgarity なる言葉を使用した。プーシキンも『エヴゲニー・オネーギン』の中に vulgar なる英語を挿入し、これと正確に対応するロシア語がないので、という弁解を添えている」(91 - 92ページ) とある。こうした言葉へのこだわりから考えて、フレスタコーフには、あえて *пошлость* という語を避けていると考えてよいだろう。
- 47 Зеньковский, В. Н. В. *Гоголь*, С. 217.
- 48 原文は Vladimir Nabokov. *Lectures on Russian Literature*. NY-London: Harcourt Brace Jovanovich, 1981, p. 313.
- 49 『ニコライ・ゴゴリ』、114ページ。原文は Vladimir Nabokov. *Nikolai Gogol*. NY: New Directions Paperbook, 1961, p. 72.
- 50 *Nikolai Gogol*, p. 70. 小笠原豊樹氏は「俗物と俗物根性」で「偽りの重要性、偽りの美、偽りの知恵、偽りの魅力」と訳しているが、原文はまったく同じ。cf. *Lectures on Russian Literature*, p. 313.
- 51 Vladimir E. Alexandrov. *Nabokov's Otherworld*. Princeton: Princeton UP, 1991, p. 106.
- 52 ナボコフは *poshlust* と綴っているが、Davydov が punning transcription と述べていたように、*lust* (欲望) と韻を踏ませたものだろう。
- 53 Davydov はこう述べている。“The elusive concept of “poshlust” deserves one last gloss with regard to the cultural background that shaped Nabokov’s values and contributed to such a low tolerance for anything that did not meet his high standards.” cf. Davydov “Poshlost”, p. 632.
- 54 “Interviews by Herbert Gold and George A. Plimpton”. *Strong Opinions*, p. 101.
- 55 たとえば、前述のインタビューでは、“Listing in one breath Auschwitz, Hiroshima, and Vietnam is seditious *poshlust*.” と述べているが、これはナチスの蛮行とアメリカの戦争とを同じ目で眺めてはならないというナボコフの政治観の現れだろう。cf. *Ibid.*

On the Word “Poshlost”: from Gogol to Nabokov

Yuichi ISAHAYA

Keywords: poshlost, Gogol, Nabokov, literary criticism